地域ぐるみでのキャリア教育の実践とその効果

Implementation of Career Education Involving the Entire Community and Its Effect

渡部　芳栄（高等教育推進センター）
井上　一彦（高等教育推進センター）
早川　　輝（NPO法人みやっこベース）
高瀬　和実（高等教育推進センター）

Abstract

The purpose of this study was to clarify the current situation of career education in Miyako City and future challenges. In this study, we conducted a questionnaire survey on career education in schools in Miyako City. Additional survey responses were collected from students attending the Miyakko Town 2022 event held by the nonprofit Miyakko Base, to understand future challenges to career education. The survey was conducted at 29 schools, comprising 13 elementary, 11 junior high, and 5 high schools. We obtained the following results:

- All junior high and high schools but not all of the 11 elementary schools formulated a career education plan for each grade.
- The ‘collaborative partner’ mentioned most frequently in the master plans was ‘family and community residents’. The plans of the junior high and high schools included ‘companies’, but those of the elementary schools did not. Few schools included a ‘nonprofit organization’.

The participants of the Miyakko Town 2022 event contributed the following results:

- Most children at the event had participated in a work experience program. Few children had participated in ‘starting a business’ (<15%) and ‘volunteer activity’ (20%).
- To the question of which type of citizen they are, the largest percentage of children responded ‘free person’; very few responded ‘academic’, ‘influencer’, ‘craftsperson’, or ‘hero’.

The results of this study identified the following challenges to career education in Miyako City:

- Coordination between schools, external collaborative partners, and organizations with a coordination function.
- Including tax payment and volunteer activities, which are necessary but difficult to approach, in career education.

キーワード：地域と学校，キャリア教育，みやっこタウン

１．はじめに

2011年中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では，閉じた進路指導ではなく，体系的にキャリア教育を推進することが不可欠としている。その際，学校が，家庭，地域･社会，企業，経済団体･職能団体等の関係機関，NPO等と密接に連携することが重要とも書かれている一方で，初中等教育段階では，キャリア教育に関し，全体計画やこれをより具体化した年間指導計画を作成している学校は少ないと指摘している（同答申）。

現在では，年間指導計画の作成状況は大きく改善し，就業体験も年間指導計画に書かれることが多くなってきているものの，就業体験の日数もまだ多いとは言えず（国立教育政策研究所生徒指導研究センター，2020参照），事前・事後の学びや教育活動全体を通した中での位置づけ，関係機関や外部の機関との連携・協働の度合いとその体系性などについては必ずしも明らかになっているとは言えない。

他方，2015年に出された中央教育審議会答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」では，学校を核とした地域づくりという考え方が示されており，やはり多様な主体が学校を通して子どもたちに関わることの重要性が示されている。しかし，渡部・畠山・井上が2021年度に岩手県内の学校を対象に調査した結果，地域と学校が協働する組織には保護者は平均７人程度（小学校6.8人，中学校7.3人），地域団体は平均10人程度（小学校11.0人，中学校9.8人）が属している一方，社会教育関係者は0.6人程度（小学校0.7人，中学校0.5人），幼稚園･保育園等関係者は0.5人程度（小学校0.5，中学校0.4人），NPO関係者にいたってはほぼ皆無（調査協力校382校中，３校のみ）となっており，政策的に求められている「多様な主体」が関わり，あるいは「家庭，地域・社会，企業，経済団体・職能団体等の関係機関，NPO等と密接に連携」したキャリア教育には，まだまだほど遠い現状にある可能性が高い。それに加えて，渡部・天野・高瀬（2019）が明らかにしたように，岩手県の中学校では，「家庭学習の少なさ」「部活動の加入率の高さ」「家庭・地域の学校への関与の少なさ」が全国でもトップクラスであり，学校への依存体質があること（もしくは，学校が様々に抱え込みやすいこと）がわかっている。

筆者らは，令和４年度岩手県立大学地域協働研究において，宮古市にてキャリア教育を展開しているNPO法人みやっこベースとともに協働研究「宮古市における地域ぐるみでのキャリア教育の体系的な展開」を実施した。上記のような現状から，地域と連携・協働した持続可能なキャリア教育を推進することが宮古市含む岩手県全体の地域課題として挙げられるが，宮古市におけるキャリア教育の現状を明らかにし，NPO法人みやっこベースが実践している「みやっこタウン」の取組を評価することで，宮古市における今後の課題を検討することが本研究の目的である。

２．宮古市内小中高への調査

宮古市内の学校における学校外の組織等と連携したキャリア教育の現状の一端を明らかにするため，2022年８月に宮古市内に所在する小学校13校，中学校11校，高校４校に調査票を送付した。ただし，高校のうち１校は校舎が別々のため２校とカウントし，対象は全体で29校となっている。内容は，キャリア教育の全体計画・学年計画の有無，及び，

ある場合にはその中に登場する連携・協働先や具体的事例と，キャリア教育において今後希望する連携先や内容についてである。回答は学校と地域の連携・協働に詳しい先生やキャリア教育に責任をお持ちの先生にお願いした。学校段階別の回収状況は表１のとおりである。

表１　調査表回収状況

	配布数	回収数	回収率
小学校	13	9	69.2%
中学校	11	3	27.3%
高　校	5	3	60.0%
全　体	29	15	51.7%

１）計画の策定状況について

表２　学年計画の有無

学校段階	学年	計画がある学校
小学校	1 年	3（33.3%）
	2 年	3（33.3%）
	3 年	3（33.3%）
	4 年	3（33.3%）
	5 年	3（33.3%）
	6 年	3（33.3%）
中学校	1 年	3（100.0%）
	2 年	3（100.0%）
	3 年	3（100.0%）
高　校	1 年	3（100.0%）
	2 年	3（100.0%）
	3 年	3（100.0%）

まず，回答があった学校のすべてでキャリア教育の全体計画は作成されていることがわかった（図表は割愛)。表２は，さらに学年ごと計画の作成状況をまとめたものである。これを見ると，中学校・高校では学年ごとに作成されていることがわかり，小学校では学年ごとに細かく作成しているところが少数であることがわかる。従来から「進路指導」という名前で指導が行われてきた中学校・高校では，学年ごとの計画が作りやすいのかもしれない。小学校においても，もしかするといくつかの学年や発達段階に応じて何らかの計画は作られている可能性はある。

表３　計画ごとの記載連携先（数字は記載のある学校数）

学校段階	連携先	全体	１年	２年	３年	４年	５年	６年
小学校	家庭	6	1	1	1	1	1	2
	地域住民	6	1	1	0	0	0	1
	企業	1	0	0	1	0	0	1
	NPO	2	0	0	0	0	0	0
	幼稚園	0	0	0	0	0	0	0
	小学校	1	0	1	1	1	1	1
	中学校	0	0	0	0	0	0	0
	高校	0	0	0	0	1	1	0
	大学	0	0	0	0	0	0	0
中学校	家庭	3	0	0	0			
	地域住民	3	1	1	1			
	企業	2	1	3	1			
	NPO	0	0	0	0			
	幼稚園	0	0	0	0			
	小学校	0	0	0	0			
	中学校	0	0	0	0			
	高校	2	1	1	2			
	大学	0	0	0	0			
高　校	家庭	2	2	2	2			
	地域住民	3	3	2	2			
	企業	2	1	2	2			
	NPO	0	0	0	0			
	幼稚園	0	0	1	0			
	小学校	0	0	0	0			
	中学校	0	0	0	0			
	高校	0	0	0	0			
	大学	2	2	2	2			

まず全体計画を見ると，学校段階を問わず多くの学校で家庭・地域住民を連携先として挙げていることがわかる。企業については，中学校・高校では連携先となりやすい一方，小学校では連携先にあげている学校は少ない（１校のみ)。NPO については，小学校では２校ほど挙げているが，中学校や高校では連携先としてあがっていない現状がみえる。また，他の学校園については，小学校ではほとんど連携はなく，中学校・高校では上級学校

との連携があげられ，進学指導という意味で連携先となっている可能性が高いだろう。ただし，コロナ禍において実施できる見込みがなく，記載されなかった学校がある可能性も否定はできない。

表２で見たように,学年ごとの記載がある学校はどの学校段階･学年でも３校ずつとなっていた。そのうち学年ごとに具体的に連携先として記載がされやすいのは，中学校の「企業」が２年生でいずれも連携先に上がっており，職場体験が２年生に組まれている可能性を示唆しているといえる。高校では「地域住民」が１年生でいずれも連携先に上がっており，地域と学校との距離感という意味では徐々に遠くなりうる高校において連携先に上がっているのはやや意外であった。その他では，中学校の「高校」や高校の「大学」は，先に述べたような進学指導の一環と考えられる。また，高校では「家庭」「地域住民」「企業」も比較的多く連携先として挙げられている。いずれも対象の学校数が少ないという理由もあるかもしれないが，現在はすべての県立高校で取り組んでいる高校魅力化の取組も関係している可能性もある。

２）今後希望する外部との連携

今後希望する外部との連携について記載があったのは，全部で８校（小学校４，中学校１，高校３）であった。小学校では今のところ外部との連携が多くはないことは確認したとおりだが，今後希望する外部との連携に関する記載の多さは連携への期待の裏返しと言えるかもしれない。具体的には，「幼稚園」「保育所」「中学校」といった他の学校段階や，「宮古水産振興センター」や具体的な企業等名の記載があった。教育段階の縦のつながりとともに，外部の企業等との連携を求めている様子が伺える。

中学校では，「宮古市の商店街や商工会議所，市役所などとタイアップし，街づくりの一部を担っていけるような活動」という，単に学ぶだけにとどまらず，一歩踏み込んだ記載が見られた。また，「地域との連絡調整を担う人材が必要」というメタ的な観点からの記載もあった。高校においても，「地元の小中学校でプログラミングの出前授業を実施したい」という記載や，「魅力化協働パートナーとより一層連携を深めたい」といった同様の記載も見られた。

３．参加児童のみやっこタウンでの活動

１）みやっこタウンについて

みやっこタウンはNPO法人みやっこベースが宮古市や市内の事業所などと協力して開催する一日だけの子どもが主役の街であり，子どもたち一人一人が町の一員となって職業体験や町の運営体験など様々な体験をすることで社会に参画するイメージを持ってもらうことが目的である。

みやっこタウンでは実際に子どもたちが暮らす社会と同じようにハローワークで仕事を探し，仕事に就くことができる。タウン内の仕事は前述したように宮古市内の事業所の協力を得ているため，宮古市内に実際にある仕事ばかりである。また，タウンの中では独自の疑似通貨である「ベスカ」が流通していて，参加者は仕事などで稼いだ「ベスカ」で買い物をしたり，食事をしたり，遊んだりすることができる。さらに，タウン内の大学で資格を取って給料をアップさせることもできる。他にも消防団に入団する，ボランティア活

動に参加する，本物の投票箱を使って市民投票をおこなう，稼いだベスカで納税するなど，楽しみながら町の仕組みを知ることができる。こうして町の一員として一日を過ごす体験を通して，子どもたちは自分の行動が「誰かの役に立つ」ことや，「町に良い変化を生みだす」ことを学ぶ。また，宮古市の産業や仕事に興味を持つきっかけにもなる。

一日の最後に，参加した児童にアンケートを実施した。内容は大きく分けて４つあり，「数字でふりかえるみやっこタウン」「できたことビンゴ」「キミのみやっこタウン市民タイプは？」「感想」である。このうち「数字でふりかえるみやっこタウン」「できたことビンゴ」では，みやっこタウン内で行うことができる行動について，グラフへの記入やビンゴカードへの丸付けを通して，自身の行動を振り返ってもらった。「キミのみやっこタウン市民タイプは？」では，あらかじめ設定した８つのタイプから一つを選び，その理由を記入してもらうことで，自身の行動特性をふりかえってもらった。「感想」では次年度以降の参考にするために「良かったところ」「あったらいいと思うもの」「次回も参加を希望するか」について尋ねたほか，自身の成長や変化を言語化してもらうために「みやっこタウンで自分が成長できたと思うところは？」「みやっこタウンを通して，きょうみをもったことは？」という質問をした。

２）総合的振り返りについて

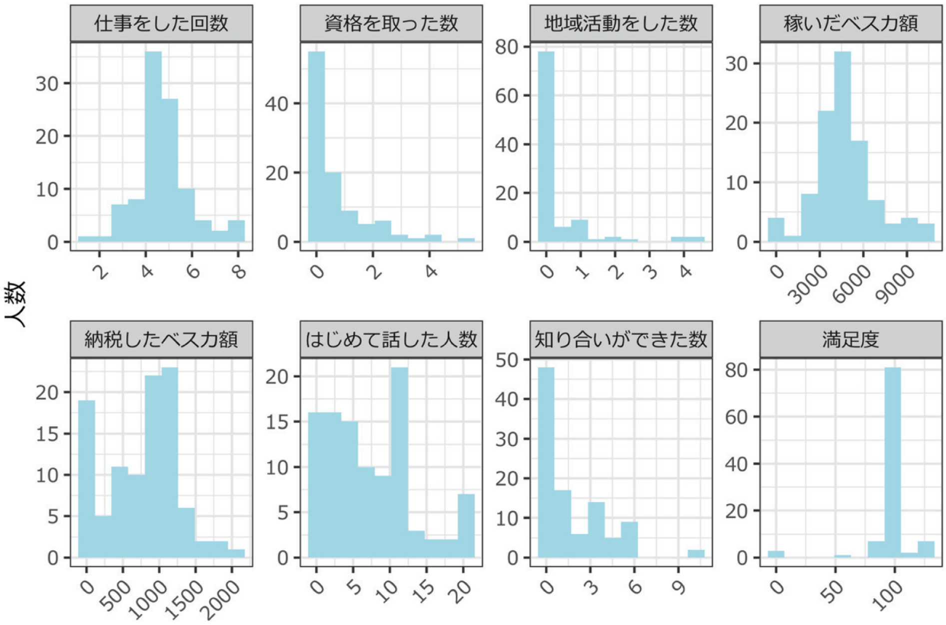

図１　振り返り回答ヒストグラム

表４　振り返り回答の記述統計量

	平均	SD	最小	最大	歪度	尖度
仕事をした回数	4.7	1.15	1.7	8.2	0.75	1.28
資格を取った数	0.7	1.05	0.0	5.3	2.10	4.28
地域活動をした数	0.4	0.87	0.0	4.4	3.27	10.11
稼いだベスカ額	4,803.5	2,101.88	0.0	10,315.8	0.45	0.80
納税したベスカ額	760.4	491.53	0.0	2,063.2	-0.12	-0.65
はじめて話した人数	7.2	5.62	0.0	20.4	0.77	-0.12
知り合いができた数	1.7	2.17	0.0	10.2	1.58	2.62
満足度	97.7	19.49	0.0	126.3	-3.76	16.20

みやっこタウン全体を通した振り返り（８項目）について，回答の分布をヒストグラムで示したものが図１，記述統計量を示したものが表４である[1]。ヒストグラムを見れば回答の偏りの状況がわかるが，記述統計のうち歪度はプラスであれば左に偏っている様子を，尖度は０以上であれば尖っている（集中している）様子を示している。例えば，グラフ・数値ともに特徴的なものの１つとして「地域活動をした数」を見ると，歪度・尖度ともに大きな正の値となっている。グラフを見ても全体として左に偏っており，ほとんどがゼロ付近に集中している様子がわかる（「資格を取った数」「知り合いができた数」もこの類である）。一方「満足度[2]」（どれぐらい楽しかったか）については，尖度は正の大きな値を示すが歪度が負であり，右に偏っている（すなわち，楽しかった値を100付近で回答した児童が多い）ことがわかる。「仕事をした回数」はやや尖度は大きいが正規分布に近く,「稼いだベスカの金額」も正規分布に近い。「納税したベスカの金額」「はじめて話した人の数」は，真ん中あたりが最も多くなっているが左のほうにも高い分布が続いている特徴がある。

平均を見ると,「仕事をした回数」が４～５回とじっくりと仕事の体験ができている児童が多い一方で，最小が1.7（おそらく２）と，それ以外のことに時間を費やした児童もいるようである。「資格を取った数」「地域活動をした数」については，平均的に０に近く，体験はあまりされなかったようである。また,「はじめて話した人の数」が平均で７人程度と多いが,「知り合いができた数」は1.7人と少ない。これは,話をしたけど知り合い（友達）にはならなかったというパターンもあるが,「はじめて話した人の数」にはみやっこタウンに関わったボランティア（大人やこども実行委員）の数が入っているためとも考えられる。また,「稼いだベスカの金額」に応じて「納税したベスカの金額」も多くなりそうだが，分布の形状は似ていない。納税の意識まで浸透した児童は多くはなかったと言えよう。

３）みやっこタウンで行ったことについて[3]

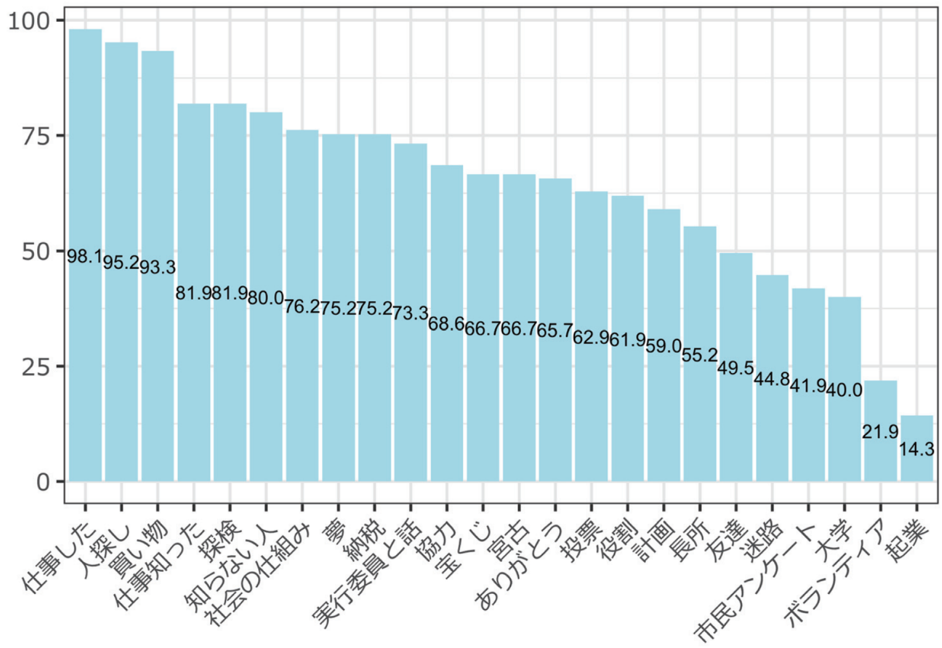

図２　みやっこタウンで行ったこと

ほとんどすべての児童が体験したのは仕事であり，これはみやっこタウンの目的からすると当然の結果である。ついで多いのは，人探しをしてスタンプをもらうことやデパートで買い物をすることであり，ここまでは９割以上の児童が体験をしていた。

一方で少なかったのは起業であり，15%弱の児童にとどまった。また，ボランティアをしたという児童も少なく，この２項目は他よりも体験割合は極めて低い。大学で学ぶことや市民アンケートに協力するというのも，４割程度にとどまっている。

４．みやっこタウン参加児童の成果等

１）市民タイプに関する児童の自己評価ついて[4]

参加した児童がみやっこタウンでどんな市民だったかを自己評価させた結果を示したものが図３である。「その他」を含めた９タイプから選択してもらう形式だが，圧倒的に多かったのは自由人（いろんなことを自由に楽しんだ人）であり，ついでよくたがり（買い物や遊びを楽しんだ人）が多い。ともかく，みやっこタウンにおいては自由に楽しんだという児童が７割以上である。一方で，学者・インフルエンサー・クリエイターといった，新しい価値を生み出すようなタイプは少なく，人助けや誰かの役に立つタイプであるヒーローもかなり少数であった。

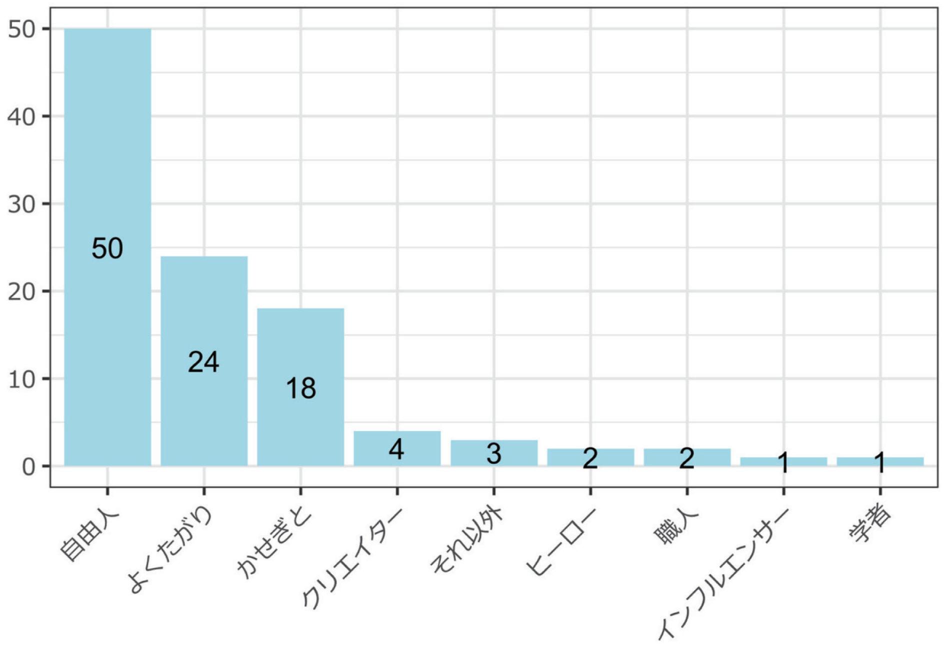

図３　市民タイプの自己評価

2）みやっこタウンに対する感想

図４　良かったところ

図５　あったらいいなと思うこと

図６　自分が成長できたと思うこと

図７　興味をもったこと

最後に，参加児童に記載してもらった自由記述の分析結果をまとめて見ていく。分析にはワードクラウド[5]を用いた。

図４は「みやっこタウンの良かったところ」に対する回答であるが，圧倒的に「仕事」という言葉が多く，職業も含めいろいろ体験できた，そしてそれが楽しかったという声が多かったようである。

図５は「みやっこタウンにあったらいいと思うこと」に対する回答であるが，ペットショップ，ケーキやゲームを扱う仕事，先生などが特に多かったようである。ケーキに関連して，図には表れていないが「パティシエ」といった回答も比較的多く出ていたことも付け加えておく。

図６は「みやっこタウンで自分が成長できたとおもうところ」に対する回答であるが，「人」という単語が最も大きく表示されている。分析上の問題もあるが，ここには「１人でやる」という言葉や，「大人」「他人」などの言葉が混在している。ただし，自分を理解したり成長させるということはキャリア教育の大きな目的の１つでもあり，そうした気付きがあったことは良かった点である。その他，ここでも「仕事」が出てきており，仕事に対する理解や経験ができたということでもある。「行動」はほぼ例外なく「一人で」「自主的に」といった言葉と結びついていた。

図７は「みやっこタウンを通して興味をもったこと」に対する回答[6]であるが，やはりここでも「仕事」が圧倒的に多く登場している。その他に登場する単語も，ほとんどが職業に関する言葉のように思われる。その中で,「夢」が広がったという回答や「お金」や「税金」の仕組みがわかったという回答も少数ながらあった。

５．まとめと課題

前節まで宮古市内の学校対象のアンケート調査結果と，みやっこタウンの事後アンケート結果をまとめてきた。改めて端的にまとめると，以下のような点が明らかとなった。

（学校）キャリア教育の全体計画はあるものの，すべての学年の計画まで立てているのは中高であり，小学校においては細かく計画を立てているわけではない。
（学校）キャリア教育の計画において連携先に挙げられるのは「家庭」「地域住民」が多いが，中学校や高校では「企業」も比較的多い（おそらく職場体験関連）。NPO においては，小学校にはあるが中高では連携相手になっていない。
（学校）現在外部との連携が少ない小学校では，縦・横の連携を今後求めている。中学校や高校では，学習のみならず実践を伴う連携を模索しているのと同時に，連携の調整等についての記載も見られた。
（タウン）仕事の経験をした児童や買い物をした児童が多数を占める一方，起業やボランティアについてはそれほど多くなかった。獲得金銭額から見ると，納税の実施は相対的に少なかった。
（タウン）タウンでの自己評価も，「自由人」や「よくたがり」を選ぶ児童が多く，自ら何かを生み出すタイプであったとはあまり思っていない。
（タウン）良かったと思うことや興味を持ったことについては，仕事というキーワードが多数出されており，仕事（働くこと）に対する理解が進み，イメージが膨らんだようである。

こうした調査結果から，いくつかの課題を指摘して本稿を終えたい。第1に，学校では外部との連携が進んでいる学校段階がある一方で，今後外部との連携をさらにすすめるためには，コーディネート機能をどうもたせるかは検討しないといけない。各種答申においてもコーディネーターは重視されているが，各校に1人ないし複数人配置するというのは，大都市（宮古市内でも市街地）なら可能性もあるかもしれないが，そうでない地域においてはそれほど簡単な話ではない。複数学校の連携組織，あるいは教育委員会がその機能を果たすなども検討しなければならないだろう。

第2に，みやっこタウンにおいては，子どもたちが仕事をし，それを通してまちの運営に関わるという狙いは達成できているとも言えるが，仕事以外の活動（ボランティア等）については児童はあまり経験していなかった。また，現在市内にある仕事の紹介はできているとしても，（少）ない仕事（パティシエやペットショップなどか）や，起業などの新たに価値を生み出すという観点についてはみやっこタウンでは実践しきれていない。無理にみやっこタウンに組み込まずとも，別の機会とうまく連携を図る必要があるだろう。加えて，仕事に関連する納税の意識についても同様である。

しかし，学校教育ではできない職業体験・キャリア教育を地域ぐるみで実践している貴重な事例であることは間違いなく，こうした取組を学校の教育活動とどのように連携させていくのかについても，大きな検討課題として残されているだろう。

付記

本研究は令和4年度地域協働研究費（研究代表者：渡部芳栄，学内研究分担者：高瀬和実・井上一彦，研究課題名：宮古市における地域ぐるみでのキャリア教育の体系的な展開）の助成を受けたものである。

参考文献

国立教育政策研究所生徒指導研究センター，2020，『キャリア教育に関する総合的研究第一次報告書』

渡部芳栄・畠山大・井上一彦，2021，『「学校と地域の連携・協働に関する調査」結果報告』（調査協力校フィードバック資料）

渡部芳栄・天野哲彦・高瀬和実，2019，「岩手県の中高生の学力やキャリア形成に関する調査研究―沿岸部と内陸部の格差を生んでいるものは何か―」岩手県立大学研究・地域連携室編『地域協働研究研究成果報告集』7，pp. 16-17

小林雄一郎，2017，『Rによるやさしいテキストマイニング』オーム社

＜注＞

[1] 参加児童には，自分の振り返りを棒グラフで表現してもらった。厳密に表現できていない回答もあり，ここでは子どもたちが表現した棒グラフの長さを測定し，目盛りに合わせて推定値を算出した。アンケートで尋ねている項目は，回数・金額・人数など，厳密に言えば整数値しか取らないものであるが，今回の算出方法によりほとんどの回答が小数点で表されている。

[2] 0にカウントされる児童も3人いる。ただし，これは0なのか回答しなかっただけなのかの判断がつかない。

[3] グラフのラベルは，以下の質問項目を示している。

略称	項目
仕事した	仕事をした
社会の仕組み	社会の仕組みを知ることができた
実行委員と話	子ども実行委員会の人を話した
計画	一日の計画を立てて行動した
投票	投票した
協力	他の人と協力して行動した
宝くじ	宝くじを買った
ありがとう	誰かに「ありがとう」と言われた
人探し	人探しをしてスタンプをもらった
知らない人	知らない人に話しかけることができた
買い物	デパートで買い物をした
迷路	迷路で遊んだ
市民アンケート	市民アンケートに協力した
ボランティア	ボランティアをした
宮古	宮古のことにくわしくなった
友達	新しい友達ができた
役割	自分の役割を考えて行動した
起業	起業した
仕事知った	いろんな仕事について知ることができた
納税	納税した
夢	将来の夢が広がった
探検	みやっこタウンを探検した
長所	自分の長所が見つかった
大学	大学で学んだ

[4] グラフの項目は，以下の質問項目を示している。

項目	説明
かせぎと	一生懸命たくさんの仕事をした人
学者	大学にたくさん通って学んだ人
職人	こだわりをもってものづくりや仕事をした人
ヒーロー	人だすけや誰かの役に立った人
クリエイター	起業をしたりあたらしいものを作り出した人
インフルエンサー	誰かに影響を与えた人
よくたがり	たくさん買い物や遊びを楽しんだ人
自由人	みやっこタウン内のいろんなことを自由に楽しんだ人
それ以外	それ以外

[5] ワードクラウドは，「テキストに高い頻度で現れている単語が大きいフォントで表示」される可視化の方法である（小林，2017，p.119）。

[6] 質問文にある「興味」という言葉は除外している。